□神戸情話〈6〉

幻のストリートガール

矢崎　泰久
〈話の特集　編集長〉
え・小西　保文

一人で過したい夜がある。
誰にも会いたくない、誰とも口をききたくない。
かといって、ホテルへ戻って本を読んだり、テレビを見たりといった気分でもない。つまり、街の中で一人ぼっちでふらふらしていたいのである。目的もなく、ごく気軽に。
テレビのビデオ撮りが終って、タクシーに乗ったのは、午後九時ころだっただろうか。生田東門筋で車から降りて、足の向くまま歩いていると、こんな時に限って知人に会う。
「どうです、久しぶりに一杯」
「いや、ぼくは不調法な口ですから……」
「ま、そんなことおっしゃらず」
相手は食い下ってくる。
「ちょっと人と会う約束をしているものですから」と私。
「ほう、で、どちらで」
「あっちの方です」なぜか私はあわてて、山側を指す。相手は、あきらめるどころか、
「あっちというと、どこです」
「その、北野町あたりです」
「デートですか？　お安くないですな。ではお近くまでご一緒しましょう」
仕方なしに、彼と肩を並べて、ゆるい坂道をのぼりはじめる。拒否する理由もないのだから、と自分にいいきかせたりする。それにしても、私の口は重い。何を問われても生返事だから、相手も異常に気づいて、
「どこか具合が悪いのでは……」とか「疲れてますねえ、休養しなくちゃ保ちませんよ」などと忠告されてしまう。
とにかく、別に行く先を決めているわけではないので、歩いていても、どこへ行ったらよいのかこちらは気が気ではないのである。
序々に勾配が急になる。Tハイツという白いマ

ンションが夜の中に浮き上って見えた。私は、やっと行先を見つけることができた。

「ではまた、ここで人と会うものですから」

一年ほど前に開店した会員制のコーヒー・ショップに逃げるように飛び込んだ。ここの古いオルゴール（といっても、大きな機械であって、見るからに時代もの）の音色がすばらしい。疲れた時、美しいウエイトレスたちの姿を何となく目で追いながらぼんやりとした時間を過すのには、実に適している。ブルーマウンテンを飲み終えたころ、私と同じように、一人でぼんやりとコーヒーを飲んでいる若い女性の存在に気づいた。ひどく疲れているようでもあり、それがまた魅力のひとつでもあるといった印象であった。大理石でつくられているのか、石に光りのある暖炉の横で、じっとうづくまってでもいるかのように、彼女はひっそりと、しかし、確実な存在感を漂よわせながらすわっているのであった。

ラスト・オーダーの時間がきて、私と彼女以外にすでに客はなかった。私は重い腰をあげてコーヒー代を払う。空腹だったが、食事について考えることもめんどうであった。がっしりしたドアを押して外へ出ると、ひんやりとした空気が全身をすっぽりと包んでくる。背後に軽い靴音がして、振り向くと、先の席にいた女性であった。おそらく、私が立ったのをシオに、彼女も閉店時間であることを知って出てきたのであろう。スタイルのいい、美しい顔が近づいてきた。服装のセンスも上等である。

階段の下で、じっと彼女を見ている私に軽く会釈をした。私はハッとして、どういうわけか瞬間的に「おひまですか」と問いかけた。「ええ」憂いのある笑顔が返ってきた。それから私たちは並んで歩きはじめた。二人とも口をきかない。ただ寄りそうよう歩いている。まっすぐ三の宮まで下って、それから港へ抜けた。夜の波止場をぐるっと回って、私の泊っているホテルのバーへ入った。すっかり喉が渇いて、私はめづらしくビールを頼んだ。「お連れさまは」とボーイがいうと、すき通るような声で「同じものを」と彼女がいった。ここのバーは午前零時に終ってしまう。

地下からエレベーターに乗って、私は部屋のある十階を押した。彼女は黙ってついてきた。そして、私たちは、その夜一緒に寝た。みずみずしい果実を、ゆっくり味わうようであった。

電話のベルに起こされると、すでに彼女の姿はなかった。夢を見たような思いであった。デスクの上に書き置きがあった。

「お財布から三万円いただきました。私は街の女（ストリートガール）です。あなたにとって高い買物でしたら許してください」達筆でそう書かれてあった。彼女から私が聞いた言葉は「ええ」と「同じものを」だけであった。名も知らない。私も告げていない。しかし、ベッドには、ほのかな移り香が漂っていた。

レストランで朝食をとった。財布を出しながら、ああこの中から三万円失くなっているんだなと思った。ところが、どうも昨夜コーヒー店を出るときに、何となく七、八万あるなと思ったときと中味が変っていない。つまり、三万円はむろんのこと千円も失くなってはいないようであった。

今だにわからない。私の錯覚なのか、あの女性のジョークなのか。でも、世の中には、わからないままのほうがよいこともありそうである。そっとしておこう。

□エッセイ

神戸——東京

東京アレルギー

横尾　忠則
〈グラフィックアーチスト〉

上京してから十五年になる。その前は神戸に四、五年住んでいた。十五年の東京生活だが、東京についてはほとんど何も知らない。上京早々、東京タワーと宮城を見物したまま、その後これらの場所にも一回も訪れていない。浅草にしても、池袋にしてもそうである。

ここ四、五年にいたってはほとんど成城の仕事場中心で都心に出ることはない。ひと月に一度も都心に出ないことさえある。年々東京の人口や車が増加していくようで、とても人混みの中を歩くというようなことができなくなってしまった。このような大勢の人々の中に入ると、自分もこれらの人々と一緒にどこか恐ろしい場所に運ばれていくような気がして、自分が自分であろうとすることに全く不安と自信を喪失してしまうのである。

神戸から上京した一九六〇年頃は現在の東京のように街が混雑しているようなことはなかったが、それでも人出の多い銀座や新宿が珍らしく、暇つぶしによく人混の中に入っていき、一日も早く東京の一部になるように努めていた。

ところが最近はどうしたことか、えらい東京アレルギーになってしまい、一週間に一度は東京を離れなければどうにもならないような気分に襲われている。二年前からの計画で北海道から九州まで日本縦断旅行を始め、やっと先週富士山麓周辺を最後にこの長い旅行が終ったが、このくせがついてしまったのか、一カ月も東京にジッとしていると、今にも大地震が襲ってくるのではないか、あるいは光化学スモッグで命を落すのではないかと、東京に関しては常に暗いイメージを抱いてしまう。

この間久し振りで神戸に行ったが、この時の印象が東京に比較すると空気がとても明るいという感じを受けた。以前住んでいた青谷の辺りを車で

走りながらとても懐かしく思った。特に緑が青々とし、まだ自然が残っているという感慨に、外は冷たい風があったが、つい車の窓を開け、冷たい空気の中に頭をつき出した。

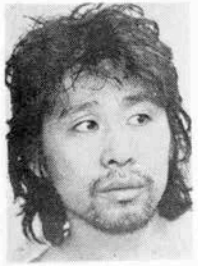
そりゃ、ぼく達が住んでいた以前に比較すると格段の自然破壊による変容ぶりだが、現在の東京を思うと、何んだかもう一度神戸に帰ってきてこちらで住んでみようかとさえ思う気になってきた。だからこの日東京に帰ってから早速神戸へ引越す話題を持ちだしたくらいだ。

公害と地震の恐怖がなければ東京は素晴しい街かも知れないが、ぼくにとってこの二点が決定的な東京アレルギーの原因だけにどうにもならないのである。まあ明快な結論も出ないまま東京に住んでいることは、ぼく自身の矛盾をさらけ出しているようなもので、東京という巨大な肉体にまだまだ執着している結果なのかも知れない。

高校まで山にかこまれた西脇に住んでいたぼくは、できるだけ大きな都会に移りたいという強い願望をいつも持っていた。加古川、神戸、大阪、東京と次第に大都会に仕事の場を変え、つい二年前までは東京よりもっと大きな都会、ニューヨークにさえ住む気になっていたので時間ができるとすぐニューヨークに出かけていたが、もうニューヨークにしても東京にしても世界の中心といわれる大都会には次第に興味がなくなりつつあるので、東京を離れて、再び神戸辺りに帰るのも時間の問題になってきているような気がしてならない。

青春時代を送った神戸は特に懐かしい場所ではあるが、それより、すぐ近くに山があり、海がある自然にめぐまれた土地ということが何より魅力的だと思う。もちろん、自然に恵まれた土地なら他にも多くあるが、あまり地方に行ってしまって仕事の注文が急にさっぱりなくなってしまうのも困るので、やはり神戸辺りがちょうどいいのではないかと考える。しかし先日、休日だったせいもあるが、三宮の地下街やセンター街のあの気違いじみた人混みは東京とちっとも変っておらず、少々腹立たしくさえ感じてしまった。神戸も新しいビルや道路や人口が次々と増え、日に日に昔の面影をなくしつつあるが、もうこれ以上自然破壊はストップしてもらいたいと本当に心の底から念じたくなる。東京にはもう人間と自然のバランスはないが、神戸にはまだその望みは多少なりともあるように見える。

街が発展することは必らずしも人間が幸せになるということではないことを、東京がすでに立証しているはずである。それよりも一日も早く人間と自然との関係をもっと密接にしていくことの方が本来の人間のありかたを発見する糸口になるはずである。いつまでも神戸が美しい街であるように心から願っている。



横尾（よこお）　忠則（ただのり）

昭和七年六月二十七日、兵庫県多可郡西脇町に生まれる。西脇高校卒業。西脇時代、神戸新聞「読者のページ」へしきりにカットを投稿。昭和三十一年三月、神戸新聞宣伝技術研究室にアルバイトとして入社。以後三年余り勤務。三十五年一月上京。「現在、過去を振り返ってみてもこの神戸新聞社時代の三年間ほど楽しい時期はなかった」（「未完の逃走」より）

□第八回パリ・ビエンナーレに参加して〈1〉

ある現代美術家の非芸術的なレポート

河口　龍夫
〈造形作家〉

ソ連航空の機内放送は、ほとんど聞きとれなかったが、どこか農婦を思わせるようなスチュアデスの美しさとキャビヤのうまさは印象的であった。ジェット機が急降下を始め雲間からパリの街の明りが見えはじめた。その明暗のみのきらきらした光景を見た時、一瞬すべての音を吸収してしまったような静寂を強いられた感じがした。急速に風景が確実に大きくなりながら近づいてきた。いよいよ着陸だ、フランスのオルリー空港に。と思った時、着陸寸前の体勢から機体は急上昇した。耳も目も口も音でいっぱいになった。号音があやうく上昇していく。ちらっと死を思う。私の隣りの席で妻が機内の疲れでぐっすりと眠っている。機体が大きく旋回して、やがて無事空港に着いた。一九七三年八月十九日の夜であった。

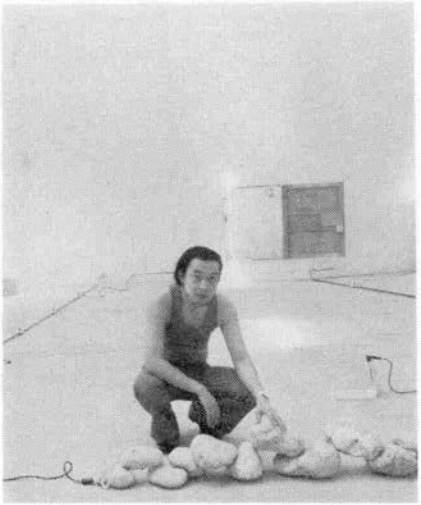
通関の面倒なことを聞かされていたので多少心配であったが、フランス人の若い税関吏はパスポートをひらきながら、それはほとんど見ないで、にこやかに何か喋りながら妻の顔ばかり見ていた。私のパスポートをひらく時にも妻の顔ばかり見ていた。もちろん私の顔など見もしなかった。それでとにかくあっさりとパスした。よほど珍しい顔であったのだろう。

空港には私同様、第八回パリ・ビエンナーレに参加するために一週間早く来ていた高山登氏と通訳の正木氏が迎えに来てくれていた。正木氏の車でオルリーからパリの市街に向った。私達の宿はケール・ホテルといって、セーヌ川の北側で比較的パリ市内どこに行くにも地下鉄が利用できる便利なところに位置していた。小さなホテルで共同のシャワー室はあるがバスも無い小部屋だったが、日本大使館からの紹介もあってか、二人で朝食つきで一日約三〇フランと安かった。その上清潔なのがよかった。すでにそのホテルには参加メンバーの狗巻賢二氏と菅木志雄氏が一週間前から宿泊していた。夜もおそかったが、高山氏と正木氏の案内で夜のパリを散歩し、カフェテリアでビールを飲んだ。いくらおそくなっても時間のたつのを感じさせない街だ。それとも私がすでに日本にいた時ほど時間を気にしなくてよい一人の異

邦人になったためだろうか。

さて、ヨーロッパ行きの最大の目的となったパリ・ビエンナーレのことであるが、日本ではこの国際展をパリ国際青年ビエンナーレ展と言っている。それは年令制限のある隔年制の国際展のためである。ところでこのビエンナーレも今度で八回目で、たしか一九五九年頃に、ジャン・ティンゲリーが動く作品を発表して話題をよんだのが初回で、未知で新しい芸術家の作品の一つの国際的な発表の場としての役割を果たしてきたことは重要であったが、あらゆる展覧会がそうであるように、回をかさねるごとに組織的な面での新鮮さがなくなり、前衛美術の擁護と引替えに一種の形骸化の憂き目にさらされることに例外ではなかった。そこで第八回展では、前回と比較してはなはだしい改良が加えられた。これまではビエンナーレ事務局から各国の美術専門機関に通達がいき、そこでビエンナーレのコミッショナーが委嘱され、その各国のコミッショナーが参加作家の人選にあたった。したがって選考作家は一見国を代表した形式になり各国の美術状況がそのまま反映して、ある意味ではおもしろいのであるが、反面国単位のレベルの差が歴然とあらわれ、展覧会全体としての主張としてはまとまりのない弱さが反映したと言われる。しかも賞制度のため、国と国との牽制、審査への疑問がさけばれた。そこでテーマ制をもうけ選考の対象と審査の対象を明確にしようとしたりされた。今回改良された点は、ひとつは国別のコミッショナー制の全廃、そのかわり議長を含めた十一名の国際的に構成された組織委員により各国から寄せられた資料をもとに、徹底した芸術上のレベルでの批評とデスカッションによる作家の選考がおこなわれた。そのため今回は九十余名という以前とは比較にならない厳選されたメンバー構成となった。他にも賞制度の廃止、テーマをおかないで選考作家のできるだけ自由な発表の場にすること などが 主要な 改良点であった。したがって出品作家はオリンピックのように国の代表として国の利害のために参加するのではなく、純粋に、国の政治性を越えて、一作家としての芸術上の主張が可能な場となった。そのため従来のようになんらかの意味で国の利害を代表しないため、国の援助を受けて参加しにくい作家も出る可能性もありあやぶまれたが、日本を初めほとんどの国が従来通り参加する作家に、最低限度の援助をすることになった。

私達（日本から五名、イタリアのミラノから一名）も国際交流基金から経済的な援助を受けられることになり、現地制作が実現したのであった。しかしながら、現地での制作がうまくいくためには幾多の問題があった。



パリビエンナーレ会場で作品セッティング中の筆者

□いんたびゅう□

〈ウェストサイド〉は最高のミュージカル

雪村いづみ

10月25、26両日、神戸文化ホール・大ホールにて劇団四季によるミュージカル〈ウエストサイド物語〉の公演が行われた。マリア役で連日ファンを魅了している雪村いづみさんを楽屋にてインタビュー。ミュージカルのあれこれを語った。

ミュージカルをやり始めたのは、そうねぇ、東宝ミュージカルかなぁ。本格的には外国のものね。八年前かな。ノーストリングス、アプローズ、メイム、そして、ウェストサイド物語（ストーリー）が四本目です。これは、二月が初演で、もう随分やってますね。日生劇場で一月、夏は北の方で一月半、今回が約二月、あと十二月まで四国、九州。日本中を殆んど回りますね。百何十回かですね。初めてじゃないんですか、こんな大きいの。

◇

地方へ行くと、ミュージカルってものを見慣れていらっしゃらないから、どこで手をたたいていいのか分らないのね。普通だったら、歌手がおじぎをしました、ハイ手をたたきましょう、となるのですが、そういうのがないでしょう。音楽が終ったらすぐ芝居、芝居が終ったらすぐ音楽でしょう。だから、ここで、手をたたいていいものかどうか、って感じがあるのね。思いっ切りたたいてくれるところもあるし、間は全然なくて最後に盛大に手をたたくところもあるし、何人か勇気ある人がパーッと手をたたけばそれにつくんですね。スターターが必要なわけね。そのスタートする人がいないと、シ～ン。昨日（十月二十五日）、神戸で公演したとき、なんでこんなところを笑うのかなぁと思うところをクスクス笑うのね。若あ～い中学生位の男の子が前の方でみているのよ。それで、ラブシーンになったらクスクス笑うの。客席をみると、十代の後半から二十代の若い人が多いわね。

◇

日本のミュージカルの公演は、長くて二月じゃない。それと、一月ずつで再演したり。ロングランってシステムがないでしょう。それだけ観劇人口が少ないのね。やってる方だって、一月の公演じゃ、やっと手に入ってきた、慣れてきたかなぁ、分ってきたかなぁという頃、終りでしょう。いいものは長くやった方がいいわね。もう少しお客さんがついてくれたらねぇ。そういう意味では劇団四季はパイオニアの気持でやっているんでしょう

ね。これで、ああ、ミュージカルっていいものだなぁって人口を増やしたわけじゃない。

◇

ウェストサイド物語の魅力ってすごいよね。あらゆるミュージカルの中で最高じゃない。どうしてこんなにうまく出来ているのかと思うね。何の意味もないような振付でも、もうドラマになっているのね。音楽もバーンスティンでしょう。どの一曲をとっても、これはチョット手をぬいているとか、これは余りよくないというのがないのよ。

◇

今から十五年ぐらい前にニューヨークで初めてみたミュージカルが、ウェストサイド物語なのね。度胆をぬかれてね。びっくりしちゃった。その頃はまだこまかいところは分らなかったけれど、何回も通って見たわ。その当時は、まさか、これを自分がやるなんて思ってなかった。高い声が出なかったからね。夢にも思っていなかったけれど、感激してね。そのあと映画をみたけれど、全然感激しなかった。映画はシネマスコープで、いろんなテクニックを使って色んな見せ方ができるけれど、舞台のよさは他のものとはくらべられないわね。

◇

普通だったら、おんなじことを何十回も何百回もやっていたらあきてダレるわね。それがダレないのね。でも稽古ではものすごくしごかれてね、泣いちゃった……。会うと口を揃えてしんどいしんどいいってね……。二言目には、私はミュージカルをやりたいって、ひと頃タレントさんで流行ったじゃない。私はいやだわ（笑）、こんなしんどいこと。本当にしんどいわよ。簡単に出来ると思っているのね、みんな。私なんてしたいことの五十パーセントも出来てないものなぁ……。くやしくってねくやしくて泣いたものよ、稽古でね。見てるのが一番いいわよ。（笑）

◇

今やっているのは十六の役でしょう。二十幾つも若くならなくっちゃいけないし、これもしんどいね。（笑）役になり切るというより、私は私のままでその人の立場になったときの気持ちをどう表わすかということに苦心しますね。また、テレビなんかでは、コチョコチョっと口先きで自然にセリフがいえればいいけれど、舞台だとあんなに大きなところの隈にまで声を通さないといけないし、なおかつ自然にしゃべらないといけない。難しいですね、芝居するということは……。

◇

楽屋に入るでしょう。まず、体操をして身体をあったかくして、開口や発声を練習して、場当たりをします。地方地方によって大きさが違うでしょう。大事な場面だけはチャンと流して稽古するのよ。毎日それだけやるの、着くとすぐに。それだけやっても、やっぱりつぶれちゃうセリフがあるのね。初めての人が、アレ、何いったかな？　ということがあっちゃいけないのね。だから、一言一言はっきりいって、不自然じゃないようにするのに苦労するのよ。

◇

神戸文化ホールはチョッと大きいわね。踊りにはしんどいわね。距離もあるし。踊りにはチョット小さい目の劇場の方が密度が高くなるのね。広いところへ行くと、それだけ空間があるわけだから、それを感じさせないように見せなくちゃいけないのよね。だけど、どうしても大きいと隙間が出来ちゃってね。だから、舞台の上で大きく見える人ってのは、お客さんに隙間を感じさせない人、身体が大きくなるわけでもないけれど、それだけ人の目を集中できる人のことをいうのじゃないかしら。

◇

私はあらゆる種類の仕事をやってきたけれど、ミュージカルに限らず生の舞台が一番好きねぇ。まぁ、特に野心もないし、いよいよ、もう本当に歌いたくないなぁと思うまで歌っているわ。（笑）

真心こめた――――

お歳暮に

ゴーフルをはじめマロングラッセ
パピヨットなど　それぞれの風味の
組合せは　どなたさまにも
喜こんでいただける真心のこもった
贈りものです

カーネーション
（ゴーフル、デセールショアシ
パピヨット、コウベピアー）
¥ 3,000

鍛えぬかれたしにせの味

神戸元町 風月堂

本　　店・神戸元町３丁目　ＴＥＬ 391－2412
さんちか店・スィーツタウン　ＴＥＬ 391－3455
全国有名百貨店・名菓街・のれん街

X'masパーティーの仲間に入れて下さい

ユーハイム　デコレーションケーキ

ドイツ菓子 Juchheim's

ユーハイム

本　　店 三宮生田神社前 TEL(331)1694
三　宮　店 三宮大丸前 TEL(331)2101
さんちか店 三宮地下街スウィーツタウン内 TEL(391)3539

●座　談　会●

関西弁の芝居をやろうよ

——喜劇「びっくりハウス」上演に際して——

〈出　席　者〉

田辺　聖子・筒井　康隆・夏目　俊二

〈作　家〉　〈作　家〉　〈演出家〉

喜劇「びっくりハウス」三幕

☆スタッフ

作　田辺　聖子
演出　夏目　俊二
美術　たかはしもう
照明　細江田　寛
効果　片桐　要
舞台監督　井崎　雄

☆キャスト

沼田修二（タクシー運転手）浜田　義則
ハルミ（その妻）　木村　悦子
沼田健一（中小企業会社員）小林　郁夫
まゆみ（その妻、花形評論家）小倉啓子
本　間（友人、タクシー事務員）李　敬司
モモ子（その妹）　細川　和子
稲田　稔（バス運転手）　有本　啓一
平作（その伯父）　西村　和徳
立岩連太（大学助教授）　大川きよし
おばはん（アパート管理人）荒本　陽子
他

編集部　十二月二十一日に兵庫県民小劇場の「県民土曜劇場」で、田辺聖子さんの原作、〝劇団神戸〟の夏目俊二さんの演出による喜劇「びっくりハウス」が上演されます。それで今日は筒井康隆さんにもご出席いただいて、「びっくりハウス」を中心に関西の演劇のアレコレをお話し願います。

★私は劇的構成ができへんの

夏目　田辺さんは、今、大物中の大物と取り組んでおられて大変ですね。だからいい時期に書いておいてもらったと思ってね。今だったら物理的に割り込む隙がないから。（笑）

田辺　大体、私はドラマティックな構成いうのができへんわけ。ラジオドラマは書けてもステージドラマはようせえへんかったんですわ。そやから、本当は、テレビドラマを勉強せんならんときに、ちょうど、芥川賞をとって、いやぁ、よかったと思って……。（笑）

ズッと労演に長いこと入ってたから、お芝居はわりかしよく見ましたね。好きだったし。憶えているのは〝民芸〟ですね。厚味があったなぁ……。「セールスマンの死」も見たし、「オットーと呼ばれる日本人」も……。

私の書くものは、どうしても、

一対一、漫才になるからね。たくさんの人間を動かさせられないの。小説なんかもそうで、地の文をひとりでしゃべっているみたいで、私には、平家琵琶の形が一番よく合うのね。たくさんの人物の出し入れってのは無理ね。演出に苦労しやはるけれど、適当にやってくれはったらね。(笑)本人が勝手に書いててこんなこというてるんですけどね。(笑)

夏目　劇のあらすじは、二組の夫婦がありましてね。弟はタクシーの運転手で兄貴はごくごく当たり前のサラリーマン。二人とも無類の愛妻家なのに、それがもののはずみで離婚する、しないの騒ぎになって、仲を取りもつ人が出てきたり、逆の人が出てきたり、大勢集って、ワアワアいってるうちに世の中みんな狂うとるんやないかこれつまり「びっくりハウス」やないかということになっていくんです。そのプロセスで大いに笑ってもらって、最後に、ハテ?ということになればと思ってるんですが……。

田辺　原作は二つの短篇なんです。

夏目　「びっくりハウス」と「もと夫婦」。どっちが先でしたか?

田辺　どっちだったかなぁ。あんまり間をおいてないんですが。もう何年も前ですね。

筒井　「びっくりハウス」は傑作ですね。あれは田辺さんの小説のなかでは一番気狂いじみてますね。(笑)女性の書いたものとはチョット思えない。

田辺　小説を書くのと、ドラマを書くのとは違いますね。人間が並んでいるのを想像する力がないのね。舞台として立体的に頭に浮かばないでしょう。そやから、非常に頭をひねって。出演してた人を忘れたりしてね。(笑)小説だったら絶えず対象と自分との一対一しかないから書きやすいんですけどね。

藤本義一さんなんかみていると殊更なる才能やと思いますね。小説では、自ずからなる起承転結というのはできるけれど、構成力という点では、どうも私は……。だから、藤本さんは小説は構成やいうけれど、私は文体やというの。文体ばかり考えている人には芝居いうのはできない相談やないかな。やっぱり、劇的構成ができる人と独白というか、語りの人とタイプが二つあるのでしょうね。劇的構成が非常に向いてない私が劇を書いたのだから。(笑)

夏目　小説では、ズレてるのは主人公のカミさんだけかなと思ってると、その亭主も友人も次から次へ加速度的にズレてることが分っていっそ結末ではみんなが気狂いじみているあたりの語り口が、なんとも見事で、なんともおかしいんだけど、舞台ではそう鮮やかにはいかない。小説と舞台の語り口は、やはり、まったく別のものだと思いますね。

たなべ・せいこさん

★関西弁でやるから面白い

夏目　今、殆んどの劇作品は、東京の各劇団が委嘱するなりして、何らかの形で劇団とつながってい

るでしょう。そうすると、地方で新しいものをやるというチャンスはまことに少ないわけですよ。たとえば、東京でやったものを何となくこっちでなぞってみせても、それは東京の方がある程度うまいに決っているんだし、ローカルという意味で本当の良さというものを仲々出しにくい。

神戸には田辺さんをはじめ、筒井さんや陳(舜臣)さんや、いろんな方がいらっしゃるのに放っておく手はない。芝居というのはチョッと特殊だからお書きになりにくい点もあるでしょうけれど、何とか色々知恵をお貸し頂いてということがそもそもの狙いなんです。だから、文学の方だけに限らず、たとえば、音楽でも、美術でも、そういう方々の知恵を栄養にさせていただいて、どんどんコンタクトして行こうと……。

つつい・やすたかさん

なつめ・しゅんじさん

今度も美術は、漫画のたかはし・もうさん。分らへんねん、どないしょうどないしょういうてね。(笑)ワシはいつも漫画で人間の顔しか描かへんのに今度は描かれへんないうてね。(笑)

今日、筒井先生にご無理願ったのは、来年の八月に「スタア」というお芝居を神戸でおやりになるということもあって、田辺さんの次に照準合わせてるわけでして。

田辺　筒井さんはお芝居をお書きになった経験はおありなんですか。

筒井　別に……。まぁ、小説が喜劇、ドタバタやから割と芝居にしやすいところはありますね。

ユーモア小説は芝居にした方が効果があるみたいですね。殊に〝三一致の法則(註)〟でカチッと喜劇を創ったらこれは面白いですね。最近アングラの芝居がメチャクチャをやっている。あれでは人は集まらんわけで、逆に、〝三一致の法則〟でやってしまったら喜劇が一番入るん違うかと思うんですが。

田辺　笑いが漫才みたいに散発的になってしまう恐れがありますね私らの芝居だと。有機的につながって喜劇の芝居にならないかも分らない。

夏目　結局、役者にかかってくる比重が大きいわけですね。でも、見る方もうまく笑ってくれないと。

田辺　松竹新喜劇なんか非常にうまくできてますね。

筒井　役者さんがまたうまいわけよ。新喜劇の場合、役者さんに見せ場があって、二人なり三人なり割とジックリ笑わせるわけでしょう。だから、人間をたくさん出したら新喜劇にならんと思うね。間をつくったりするから間がもたんようになってね、笑いが中断したり散発的になったりする。ようけ出てさえすれば、なんなと笑わせるんと違いますか。それと、関西の場合はやっぱり会話の面白さでしょうね。

田辺　うまく行けばそうかも…。みんな笑わんかったら、どうしょうもなくって、うまく行かへん。今度は、こちらの人が台詞をいうので、言葉に味が出ると期待してるんですよ。

右端が夏目さん

会話の面白さを生かすには、テレビのように場面転換が速かったらいいんですね。テレビってのは何人もたくさん出ていても主に扱かうのは限りがありますからね。やや小説に似てて一種別のジャンルですね。私はテレビに向くかもしれへんね。

夏目　普段みんな関西弁しゃべっているわけですよ。生活もやっぱり関西の生活をしているわけね。ところが、いざ芝居の段になると大陸で生まれたとか、九州で育ったとか、ベースの部分がどうしてもにじんでくるわけ。標準語と違って関西弁は生活語でしょう、恐いですよ。せっかく田辺さんに期待していただいても味のある台詞になるかどうか、今、大汗かきっぱなしです。

筒井　田辺さんのでもドラマをやるとき、原作を変えられてしまうでしょう。

あれは何であんな風に変えるのかサッパリ分らへんね。そのまましとけば面白いものを非常につまらなく変える。何で変えたか意味もない。

田辺　私の場合、「求婚旅行」のときはハッキリしていて、舞台が東京、考え方も職業も全部東京になってしまっている。

東京でつくるとそうなるんですね。関西での生活環境が全然分らないからみんな東京式の発想に換算してしまってね。

筒井　会話のニュアンスなんか全然ダメになってしまう。

それを東京弁に翻訳する人、関西弁知っているんですか。知らないでしょう。

田辺　だから全部変えてしまって名前だけが最後まで残る。（笑）名前なんか残したかて性がない。

夏目　そういうことはありますね。

★座付作者になりたいねえ

夏目　関西弁の芝居というと、松竹、吉本両新喜劇、それから花登喜劇、根性劇ばかりでなく、文学的にもそことはチョッと違いますというところをやりたいわけですけどね。

筒井　今までにないものをね。

田辺　新喜劇というのはやる人の個性が決っているわね。それの組み合わせですね。

夏目　だから幾つかのパターンが一めぐりするまでは大変面白いけれど、それを過ぎるとチョッとシラけたりしてね。もう一歩進めて性格喜劇、ダークコメディなどうんと乾いたものがもう出てこなければ。その点、筒井さんの「スタア」はしめらずにやれば爽快なものになると思いますが、今度の上演は、原作のまんまですか。天皇陛下やターザン、白熊なんてのもとびだすわけですか。

筒井　この間、読み返してみたら登場人物が二十何名で、一番最後のところで全部出てきてあばれるんですね。そやから、考えてみたら大さわぎになるんですね。心配になって来てね。役者さんが怪我せえへんかとね。(笑)滑稽じみたことをやらせようとこっちが一生懸命になってて、舞台機構とか舞台の狭さとか、人間がどんだけ出て来るかまで勘定してなかったんですね。

やるのは〝欅(けやき)〟の人たちで神戸文化中ホールです。五月に本公演をやって、八月に神戸へもって来て欲しいということなんですが、いっそのこと本公演を九月にしょうかとも……。そうなると神戸が初演になるんですね。

神戸で、せっかくやる限りは座付作者的な作業もしてみたいですね。僕もいつまでもああいったような小説ばっかりも書いてられへんしね。ああいうのは若いうちですね。段々年行って来たら厭になって来るね。作品の数を落として行って、ある気狂いじみた線はなるべく崩さんようにして四十五までは何とか書き続けて、それでやめて、あと芝居しょうかと考えてるんです。だから、五年先〝欅〟に僕のポストをつくれと……。(笑)

公演を控え稽古に余念のない"劇団神戸"の人々。

夏目　それは素適なお話だけど座付作者というのは、これまた非常に奇妙な作業だから拘束をうけることが大変に多いんではないかと。

筒井　でも束縛が多いから却って傑作が出来るのかも分らない。

夏目　ただ、楽屋落ちみたいな部分で、役者の名前のモジリとか、通ぶった裏話がかくされているとかの危険もあるわけでしょう。そこらへんがヒョッとしたら逆にシラける部分になって行くかも分りませんね。

筒井　だけど、それが特定のファンをつくって行く……。

夏目　親近感につながっていく部分ですね。

筒井　唐十郎の芝居がそうですね。やっぱし、根本的にはストーリーよりも何よりも役者の魅力ですね。それに尽きると思いますね。

でも、とぼけた味を出せるのが関西には仲々いないねぇ……。

田辺　関西人は地でだったらたくさんいてはるけど、演技として出すとなるとねぇ……。

★神戸独自の芝居をやろう

夏目　この頃、何か一定の発想があって、一定のやり方があって、というそんな風じゃなくてもいいじゃないかという思いがあるわけです。だから東京風のやり方があってもいいし、関西風のやり方ってのがあってもいい。

たとえば、筒井さんの「脱走と追跡のサンバ」のように、芝居になると思えないものが芝居にならないかなぁと思っているのです。おっしゃる〝三一致〟のようにきっちりと出来た構成も一つの考え方なんですが、それとは別に、一見、これはどないなるんやろかというものに発見がありはしないかという気がするのですがね。

単純には映像で考える方が処理しやすいわけですけど、おきまりの舞台の枠ではなくて、時間とか空間とかをズカズカ踏み越えて行くことが出来ないかな。今までとは違ったアングルで見ることが出来ないかなぁ。そう思うんです。

筒井　それは、たとえば、東京の劇団でいえば〝発見の会〟なんかでやってますが、僕が見た限りでは映画に及びませんね。

夏目　当然スペクタクルな情況ですから、それに見合うメカニズムがないとね。今の日本の劇場ではチョッと悲観的です。

筒井　どんな舞台でやってもあれはキチンとはならんでしょう。だからどうしてもアングラ的になります。あれはやっぱり小説のままにとどめておきたいですね。やるとすれば映画ですね。

夏目　ですから、あれをというのじゃなくて、あのようなということです。

筒井　そういうものをやるのであれば、なおさら座付作者的な作業を示せば面白いですね。どんなんでも出せるんですからね。一人二役でも三役でもね。

僕は小説書いている以上、芝居をやるときには芝居らしいものをやりたいと思うし、夏目さんは逆に文学的なものを求めてはるみたいだし、その辺、チョッと喰い違いがあるようで、もっとディスカッションを重ねて、色々とお互いのことを研究してやりたいですね。

夏目　まぁ、ついついわれわれの仕事はカッキリ舞台の枠に締められっぱなしだし、また、それをズッと今までやって来たわけだけど、こころへんで、どっかぶっこわし作業が要るのではないかと思うわけですよ。

筒井　こっちはやっぱり芝居に対するノスタルジアがある。(笑)却って、今、アングラがああいう風にやっている以上、やっぱり、チョッとガッチリしたところへ帰って行く必要があるんじゃないかと思うんですけどね。

関西には元々芝居の育つ土壌があると思うんですよ、やり方によっては。何か関西独特の、神戸独特のものが出て来たらね……。

田辺　私は、神戸で新喜劇の向こうをはったようなものが根づかないかなぁと思っているんですよ。

その意味においても今度の「びっくりハウス」の上演には大いに期待をしているのですよ。

筒井　僕らもお手伝いしますよ。

夏目　頼りにしております。

編集部　ありがとうございました

(於　竹葉亭)

(註) **三一致の法則**　règles de trois unités　西洋の戯曲作法の基本法則とされた概念で、二四時間以内に同一場所でおこる一貫した単純な物語にかぎるという、時と所と筋についての規則。(「ジャポニカ第八巻」より)

〈読者へのプレゼント〉

喜劇「びっくりハウス」公演へ読者の方10名をご招待します。ご希望の方は、葉書に住所、氏名、電話番号をお書きの上、編集部へお申込み下さい。先着順です。

日時　十二月二十一日(土)
時間　午後三時、六時三十分
場所　兵庫県民小劇場

経済ポケット ジャーナル

★兵庫県知事に坂井時忠氏再選

11月3日に行なわれた注目の知事選挙で、兵庫県の第41代知事に自民党、兵庫地方同盟などが推す坂井時忠氏（63）が、社会、共産推薦で県総評に推された一谷定之蒸氏（61）と公明党に推された飯田忠雄氏（62）を大きく引き離して再選された。

七日に初登庁した坂井知事は「一党一派に偏せず、特定のイデオロギーに偏らない住民本位の県政を進めたい」と二期目の県政への抱負を語った。

職員に迎えられて初登庁した坂井知事

★〝神戸兵庫ライオンズクラブ〟が誕生

神戸市兵庫区に、このほど兵庫県下では一〇七番めの「神戸兵庫ライオンズクラブ（中村哲之会長・クラブ員四十一人）」が誕生し十一月一日午後一時より生田区京町のオリエンタルホテルで、チャーター・ナイト（認証状伝達式典）が開かれた。

同クラブの誕生は日本で一八五五番目で、この日の式典には市内をはじめ阪神間、姫路、淡路など五七のクラブから約千人のクラブ員たちが集まり、同クラブの誕生を祝福した。

式典は正午にまずヘンデル「式典序曲」が流れ、神戸兵庫ライオンズクラブの佐本進幹事（佐本歯科）が開会を宣言し、中村会長がゴングを打ち鳴らした後、国歌「君が代」の斉唱、ライオンズクラブの歌に続いて四十一人の新クラブ員が入場し、兵庫県地区の樋橋秀一ガバナーから認証状が渡された。そのあと、デュークエイセス、木遣音頭保存会などがアトラクションを行い、華やかにチャーター・ナイトの幕を閉じた。

神戸兵庫ライオンズクラブのチャーターナイト

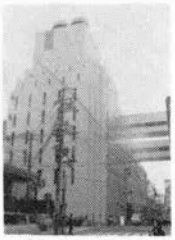
★そごう神戸店の新館がオープン

国鉄三ノ宮駅南のそごう神戸店の新館が十一月十五日オープンした。

真白な9階建のビルは、地階がギフトセンター、一階住いのインテリア、二階県民サービスセンター、三階電化用品とオーディオ、四階民芸、婚礼、和家具、ベッドなど、五階洋家具、六階食堂家具、七、八階催会場、そして九階が画廊になる予定。

新館はリビングインテリアが特徴で、各階にそれぞれトータルリビングとしての家具が置かれている。

そごう神戸店ではこの秋にそごううまいもの街もオープンしており、今度の新館の完成で、都市と百貨店との調和をめざす、いわゆるデパートメントタウン構想に大きな期待をよせている。



スマートなそごう新館

★KOBEオフィスレディ★

坂野　豊子さん（長田区）
日本楽器製造株式会社神戸店

ヤマハに勤めて二年。大卒。そんな齢には見えない。朝から晩まで音楽のなかにドップリ。五階のスタジオの管理が彼女の仕事。コンサートやレンタルのスケジュールを作ったり。学生時代は庭球をやっていた。最近はジャズも好きになったとか。が、休みには着付けやお花の勉強。琴も弾く。古風な女ですとおっしゃる。古風なひとほど芯が強い。きっとそろなのだ。（同志社女子大卒業）